昭和40年頃の赤野井湾 魞（えり）遊び（提供／えり市）

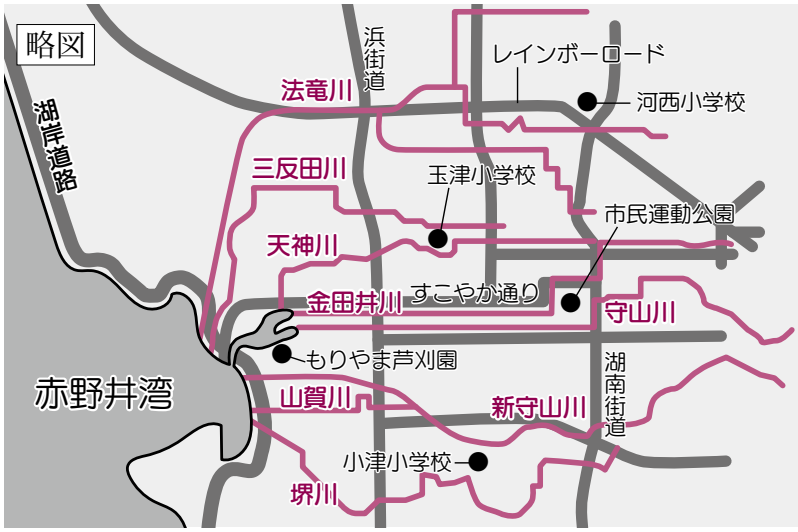
特集 未来の守山を考える

水はまちを流れて赤野井湾にそそぐ

世界中の海と同じく、プラスチックごみなどが琵琶湖でも問題となり、平成31年度から県が赤野井湾でプラスチックごみ実態調査を実施する事になりました。

赤野井湾がモデル地域となった背景には、水環境の改善を市民全体の課題と位置付ける赤野井湾再生プロジェクトや流域住民の環境活動といった働きかけがありました。

赤野井湾に流れ込むごみを食い止め、美しいかつての琵琶湖を未来に残してゆくために、私たちができる事を考えていきます。



赤野井湾には市内の8河川（堺川、山賀川、新守山川、守山川、金田井川、天神川、三反田川、法竜川）が流入しており、流域面積は市域の8割にのぼります

湖と共に暮らして 赤野井湾の物語

田中 善秋（たなか よしあき）さん（赤野井町）

玉津・小津漁業協同組合 組合長

赤野井湾で漁師をしていた祖父の背中を見て育ちました。記憶の中にある美しい水とたくさんの魚がいた湾の姿を昔話にしないために、環境悪化につながるさまざまな要因と戦いながら、新しい漁の模索に取り組んでいます。

懐かしい記憶に立ち塞がる水環境の問題と戦い続けて

信じられないかもしれませんが、私が子どもの頃の赤野井湾の水は飲めるほどきれいで、湾には数えきれないほどの鮎が立ち、波の穏やかな春先には多くの魚が産卵に来て「赤野井湾に魚島ができる」とまで言われたものです。

私たちはそれを昔話ではなく、未来の赤野井湾の姿にしたいと思い描いて、環境問題と戦っています。

昭和52年に琵琶湖で赤潮が発生した頃から水質が悪化してきました。外来魚が増え、水草が繁茂して漁船の航行にも支障が出るほどで、漁師は外来魚の駆除や水草の除去が仕事のようになってしまいました。私たち赤野井町の自治会や住民も湖岸や流域を流れる河川などで美化活動を続けています。

琵琶湖と赤野井湾で起きている問題の要因は一つではありません。さまざまな問題が出る度に、漁師や行政、市民が立ち上がり懸命な活動をしてきました。下水整備など都市環境も整い、少しずつ水質の改善が見られる一方、外来植物の繁茂や自然に還らないプラスチックごみの湖底への堆積など新たな問題が表面化してきました。

毎日見る湾だから気付く真っ白に見えた湖底の異変

琵琶湖や赤野井湾はみんなのものですが、毎日湾の風景を見ている住民だから分かる事、船で漁に出る私たちだから分かる事があります。

水質の極端な悪化は見られていないのに、それまで僅かながら見る事のできたシジミなどの生き物が見られなくなってしまった事があり、関係者は首を傾げていました。

私たち漁師はオオバナミズキンバイの除去巡回などに出ていて、泥とプラスチックごみが混ざり合い、湖底が真っ白に見える事に気付きました。環境活動の関係者がこの情報を共有した事が、湖底ごみの撤去作業のきっかけとなりました。

マザーレイクを守る誇り身近な水辺で手伝って

鈴鹿に降った雨や雪は川へ、湾へと流れ込んでいきます。私たち流域住民の力でできるのは、川だけでなく自分の住んでいる家の周りやまちをきれいに保つ事。川を大切にして少しでも琵琶湖に注ぐ前にごみを除去する事です。

市内の上流域にある自治会で子どもたちが川遊びや魚つかみ、ホタル観賞などのイベントが主催されています。里中の川がきれいになってきた証です。

川に親しむイベントは、子どもも大人も川の環境に関心を持つ事につながり、良い循環になると思っています。そのための協力をしていきたいと思っています。

私は漁師なので、生き物や魚でにぎやかな赤野井湾に戻す事が一番の理想です。

少しでも美しくなった琵琶湖で、南湖の沖合には鮎が泳ぎ、赤野井湾に真珠やウナギが育つというような、環境に合った新しい時代の漁業を確立していければと思います。

近畿の水がめと言われる琵琶湖を愛し、下流の人に安全に飲んでもらえるマザーレイクの水を守ることに誇りを持って、毎日の生活をしていこうと心に決めています。

漁師たちの地道な取り組み

赤野井湾の漁師の仕事は様変わりしています。ウナギやコイ、フナなどを捕る昔ながらの漁ももちろんしていますが、ブルーギルやブラックバスなどの外来魚駆除、外来植物のオオバナミズキンバイやオオカナダモの除去活動などの仕事が増えています。

数年前からは、漁場で見かけたレジ袋など浮遊ごみの回収運動も行っています。

❶赤野井湾に出て刺し網漁をする漁師
❷早朝から刺し網を回収する様子
❸ショッカー（電流）を使ってブルーギルなどの外来魚を駆除
❹オオバナミズキンバイ除去の様子。油断すると流れてきたわずかな茎や葉からすぐに再生してしまう

赤野井湾は豊かな恵みをもたらす

東京の料亭などに出荷される良質のウナギや湖国の郷土料理に欠かせないフナなどが赤野井湾の主な恵みです。

漁業組合では湖国特産の「BIWAパール」として一時は衰退していた真珠養殖も手掛けています。

湖の幸が並ぶ屋形船の船内

子持ちのフナで漬けた鮒（ふな）寿司

イケチョウガイから取れるBIWAパール

水辺は「守るべき場所」未来に誇れる赤野井湾を

夢は同じ「赤野井湾の再生」活動団体でプロジェクト結成

赤野井湾は「汚濁の進んだ水域」と位置付けられてきました。

漁業者にとっては生活の糧、市内の環境団体にとっては地域の宝、行政にとっては環境資源と、それまで個別に活動していた人たちが「美しく生命に溢れていた赤野井湾を取り戻したい」という同じ夢と未来を見据えて連携し、情報共有や啓発活動、定期的な現況確認などを行うため、平成24年に「赤野井湾再生プロジェクト」が発足しました。

赤野井湾は市内8河川が流入する閉鎖性の高い水域で、流れが穏やかなため、諸問題が現れやすい一方、古くから流域住民の身近な水域として親しまれてきました。

本市はほかの行政区職員から「環境活動に積極的な住民が多くて羨ましい」と言われます。夢・びわ湖や認定NPO法人びわこ豊穣の郷など環境活動に特化した団体をはじめ、小中学校や自治会などでも環境問題の改善に取り組んでいます。赤野井湾のおかげで琵琶湖をより身近に感じるからこそ育まれてきた、水環境への関心や自主的な活動意欲の高さが本市の特色となっているのではないかと感じています。

団体の連携が大きな力に 大規模な実践活動を実現

平成21年に発見されたオオバナミズキンバイという外来植物が大繁茂して在来植物を駆逐し、水辺のエイリアンと呼ばれました。

結成したばかりの赤野井湾再生プロジェクトは、喫緊の課題として情報共有、調査、現況報告、県などへの働きかけを行いました。その結果、約170人が参加する大規模な駆除活動につながりました。

市内のオオバナミズキンバイの繁茂は収束傾向にありますが、各団体は情報交換をもとに手分けをして赤野井湾ウオッチャーを実施。湖上や湖岸、流域河川の状況を定期的に調査しています。

そこで新たに問題提起されたのがプラスチックごみの散在です。河川のごみは大雨による水量増加などで赤野井湾に流れ込み、湖底に堆積していきます。昨年から始まった大規模な湖底ごみの除去も赤野井湾再生プロジェクトの顕著な実践活動です。

環境学習都市宣言のまち 赤野井湾再生へつになる

平成27年に「琵琶湖の保全及び再生に関する法律」が施行されました。琵琶湖を国民的資産と位置付け、あらゆる人々が環境・社会・経済が健全に循環する社会の実現を目指して頑張りましょうというものです。

琵琶湖は治水や利水上の側面だけでなく、観光資源や憩いの場など、さまざまな恵みをわれわれにもたらしてくれます。

美しく生き物の恵みに溢れた琵琶湖を未来へ繋ぐためには、今を生きる私たちの意識や取り組みが何よりも重要だと思っています。

本市の環境学習都市宣言でも「豊かな琵琶湖の恵みを通して琵琶湖の大切さを学び」と謳っていますが、まずは環境イベントや学習会などに1人でも多くの人に参加してもらい、琵琶湖の良さや大切さを知っていただきたいと思います。

そして、市民全体で琵琶湖や赤野井湾を「守るべき場所」「大切な場所」として行動していけたら、いつかは地元の宝として自慢できる場所になる日がくると信じています。

守山市環境政策課
赤野井湾再生プロジェクトの支援担当
プロジェクトの活動を応援し、時にはご意見をいただいて本市の環境政策に生かしています。

杉本 聡さん・小林 慶治さん(左)

赤野井湾の環境改善は市民全体の課題

「地域の水辺は自分たちで守る」赤野井湾再生プロジェクトの活動

赤野井湾再生プロジェクトは、赤野井湾の環境改善を「市民全体の課題」と位置付け、環境団体、地域住民、漁業関係者などが連携を深め、ともに赤野井湾の課題に立ち向かっています。また、国、県などへの積極的な提案活動を行っています。

オオバナミズキンバイの除去作業

昨年度までオオバナミズキンバイの除去に力を入れ、ようやく収束に向かいました。

次なる課題は湖底のごみ。昨年6月に行われた除去作業では、きれいに洗浄して環境センターに搬入したごみが680kgに上りました。湖底から引き上げられた時は泥を含んで数トンにもなっていました。

上流河川の川底にごみが散在しており、赤野井湾に流れ込んで湖底ごみの原因の一つとなっています。

赤野井湾プラスチックごみの現状

河川の底

昨年6月の湖底ごみ除去作業

定期的に連絡会を開いて、個別の活動による情報を共有し、課題解決への議論をしています

プロジェクトの主な活動内容

- 赤野井湾ウォッチャー
- オオバナミズキンバイ除去活動
- 湖底ごみ除去活動
- 水質調査＆学習会
- 啓発活動
- 提案活動

赤野井湾を取り巻く事象と背景

昭和52年	赤潮大発生
58年	南湖に初のアオコ発生
59年	世界湖沼会議
平成19年	第5次琵琶湖に係る湖沼水質保全計画策定（赤野井湾が明記される）
21年	赤野井湾にオオバナミズキンバイの生育を確認
27年	琵琶湖の保全及び再生に関する法律施行

夢・びわ湖

辻（つじ） ひとみ代表（左）
永井（ながい） 喜子（ひさこ）事務局長

水質調査や真珠貝の生育調査など市民の力で

私たち市民の力で赤野井湾流域の水辺を美しい昔の姿に取り戻そうと、湾の水質調査や淡水真珠を作るイケチョウガイの試験養殖など地道な活動を行っています。

調査などで得られたデータを市や赤野井湾再生プロジェクトに提供し、再生プロジェクトの事務局として、赤野井湾のためにできる事、必要なものを共有し、魚にも人にも住みよい水環境を求め、市民ができる事への挑戦をしています。

写真＝赤野井湾ウォッチャー

認定NPO法人びわこ豊穣の郷

金崎（かねざき） いよ子（こ）理事長（左）
中（なか） 明子（あきこ）事務局長

ホタルの棲（す）める河川、シジミの棲める赤野井湾

発足から23年になります。ホタルの棲める河川とシジミの棲める赤野井湾を目指して活動を続けています。

子どもを対象にした環境学習や赤野井湾小（お）津袋（つぶら）クリーン大作戦などが大きな事業です。

さまざまな環境保全の活動をしながら、地域とのネットワークづくりや仲間づくり、何より自然と触れ合い、水辺環境を大切に考えてくれる次の世代の子どもたちを育てていく事を中期目標に力を注いでいます。

写真＝水辺の楽校（がっこう）

里中の川で遊び、親しむ 身近な水辺を環境用水に

あきやま　みちお
秋山 道雄さん（大津市）

滋賀県立大学名誉教授

経済地理学（水資源、水環境、地域政策）の有識者として、赤野井湾再生プロジェクトの会長を務める。赤野井湾への直接的な活動と、上流域の環境用水活用の両輪での水環境改善を提唱。

河川活用で赤野井湾の再生 新たな環境問題に挑戦する

滋賀県立大学のフィールドワークの一環で学生と一緒に守山市を訪れて以来20年以上、市内の水辺や関係者と付き合ってきました。

平成18年に国が「環境用水の水利権を認める」という制度を通達したのをきっかけに、研究仲間の有志と環境用水研究会を立ち上げ、研究を続けています。

地域を流れる農業用水や都市排水などの水路や河川を生かして、まちの景観や生活環境、自然環境の維持や向上に役立てる水を環境用水といいます。

市内の身近な河川を環境用水として住民に活用してもらうことは、赤野井湾再生の大きな力になると考えています。

赤野井湾再生プロジェクトの結成当初の目的は、湾の汚濁とごみ問題に取り組むことでした。しかしオオバナミズキンバイの来襲により、その駆除を喫緊の課題としてきました。油断はできませんが、ようやく拡大を抑え込んだところです。

赤野井湾ウォッチャーなどでオオバナミズキンバイの現状やごみの散乱状況などを巡回して調査しながら、私たちもようやく当初の目的としていた汚濁とごみの問題に取り組むことができるようになりました。

市域の8割が赤野井湾上流に 市民の意識が環境改善の鍵握る

赤野井湾の汚濁は、日本が高度成長に沸いた昭和45年頃から問題視され始めました。日本一大きな琵琶湖で汚濁やごみの問題が表面化するまでにはタイムラグがあり、その間も確実に環境悪化は進みました。積もり積もった負の遺産は、今も湖底に堆積しています。枯れた蓮が溜まり栄養塩を発生させる泥や、プラスチック系など自然に帰らないごみも堆積しています。

赤野井湾に注ぐ市内の8河川は、流域面積が市域の約8割になります。水質保全には上流域に住む人の現状認識が不可欠です。赤野井湾再生プロジェクトでは日常生活での対策を協議する連絡会のほか、上流域の学区長などを総会に招いて、水環境の現状や地域の河川保全の必要性を訴えています。

自治会の中には、里中を流れる川の水質保全と美化に取り組み、子どもたちの親水河川として活用している先進地域もあります。

私は、上流域のこうした取り組みの広がりが、生活に近い水辺の環境を守り、赤野井湾再生の大きなうねりになっていくと思っています。

地域での環境用水活用が 赤野井湾のためになる

私たち赤野井湾再生プロジェクトやその構成団体などは、それぞれ地道な活動を続けていますが、環境問題に即効薬はありません。一方、苦しい活動も長続きはしません。

多くの市民がわが子や地域の子どもと日ごろから遊びやイベントなどで水辺に親しむ。そのために川を監視してごみや流木を食い止める。

こうした、暮らしのそばにある川を環境用水として活用する営みが、ゆっくりと時間をかけて赤野井湾や琵琶湖を昔の姿に戻す助けとなっていくでしょう。

あそぶ まなぶ まもる いかす みんなの水辺 ～私たちの実践活動～

★地域ぐるみの川遊び

宮城川（吉身東町）
小西 由美子 自治会長

夏休みに馬路石邊神社の参道を流れる宮城川でイベントを開催するようになって10年になります。

ごみ拾い、鮎つかみ、鮎の塩焼きと竹パン作りと盛りだくさんの内容で、準備も当日の作業も大変ですが、普段自治会にあまり関わっていない住民ボランティアや子ども会の協力もあり、まさに地域ぐるみの協力で開催されています。

地域を流れる川はみんなのものです。使い方次第で、親子の絆、地域の絆も育んでくれる素晴らしい資源になります。

魚つかみを楽しむ子供たち

★守山の表玄関を美しく

丹堂川（梅田町）
北田 勲 せせらぎ会会長

せせらぎ会は、町内を流れる川とまちをきれいにしようと、平成17年に住民有志で発足しました。

梅田町には丹堂川と支流が流れ、ほたる通り商店街があります。せせらぎに棲む魚やホタルなどを大切にしてもらえる環境を作っていこうと、定期的に美化活動をしています。平成20年には子どもたちが水辺に触れ合える川普請を行いました。

まちの玄関に位置する市街地の川を来市する人にも住民にも生き物にも優しい環境にすることを目指しています。

せせらぎの会有志のみなさん

★水辺は子どもたちの宝箱

新守山川支流（小津学区）
川上 慶子 小津小学校校長

赤野井湾に面した地域から上流の住宅街まで9自治会の児童が通っています。学校の側では、クロメダカが泳ぎ、初夏にはホタルが飛びます。

ザリガニ釣りやメダカ捕り、学習田にニゴロフナの稚魚を放流するなど、児童たちは恵まれた自然を生かしてさまざまな環境学習をしています。

新守山川に新しく遊歩道が完成しました。学習活動に生かして、琵琶湖と川、生き物と水がつながっている事を子どもたちに意識してもらえうような取り組みを考えています。

学校近くの川で環境学習

★湖上を探検思い出づくり

赤野井湾
金崎 いよ子 びわ豊穣の郷理事長

夏休みに赤野井湾探検会を開催しています。船で赤野井湾に出かけ、漁を体験したり、外来魚が食べているものを調べたりしています。ニゴロブナの稚魚も放流します。

市内の水辺で開催している水辺の楽校と合わせて、「魚がかわいそうだね」と自然とごみを拾ってくれるような子どもたちになってほしいと思っています。水辺に親しみ楽しんだ思い出は、子どもたちが大人になった時にも周囲の環境や水辺に関心を持ち続ける原動力になるのではないかと考えています。

漁を体験する参加者家族

★恵みと課題の両面を知る

赤野井湾
辻 ひとみ 夢・びわ湖代表

夏休みに「赤野井湾で育ったイケチョウガイで育てた真珠を見てみよう！」というイベントを開催しています。

湖上を遊覧しながら生き物調査や水質調査で水環境の現状を知り、試験養殖しているイケチョウガイで育った真珠を観察したり、美味しい湖魚料理を味わって、しっかり赤野井湾の恵みと課題の両面を学んでもらっています。

一人ひとりの子どもたちにとって、赤野井湾を大切な宝物と意識してもらえたらとイベントを続けています。

赤野井湾で育った真珠を観察